

団塊の世代の自分の健康に対する意識はとても強い。

この段階の世代、仕事が生計のほとんどを占めるようにひたすらに働いてきた世代だ。

それだけにほとんどの人が、第一に仕事、食事などの人付き合いも仕事関係が多く、たまのゴルフも仕事関係者と、といった具合。

いつ肩の力が抜けた生活ができていたのだろうか。ましてや自分の身体の管理については二の次に。引退が近づいたころ、身体を壊して初めて自分の生きてきた道を振り返る、といった方がほとんどであろう。

現在インプラント治療に通っている方の多くはこの世代だ。

昔、インプラント治療がそれほど普及していなかった頃は取り外しの入れ歯が主流。一般的に入れ歯はまさに砂をかむように味気ないもの



だ。一昔前の方はとてもさみしい老後を過ごしたと思われる。

引退を迎えた方々のお話を伺うと、いま必要なのは肩書でもなく、きれいな洋服や宝石などでもなく、実は「おいしいものをおいしく食べられること」だと多くの方がいう。

歯に不具合がある方は、旅行に誘われても断る傾向にある。その一方、よく噛める方は積極的に外に出たがる傾向にあって、おいしいものを食べに夫婦で一緒に旅行に行く回数も増えるといった具合だ。

インプラント治療、海外比較考

現在日本におけるインプラントの出荷本数は二年前のデータによると、年間約七十万本である。

数年前の統計では、人口一万人当たりのインプラント本数は日本が十九本、タイや中国などのアジアではたった一本、とまだかなり少ない。

それに比べ、ドイツ、スウェーデン、イタリアなどのヨーロッパではなんと百二十〜百五十本と、かなり普及している。

医療の充実と、人生のQOLを重視する欧州の国民性は、はっきりとインプラント人口の多寡に現れているといえよう。

ただ、海外でインプラント手術を受けたい、と希望される方は相応の注意が必要、という話をしたい。というのは、私のクリニックでは、インプラントを受けるためにわざわざタイまで出向き、タイで下顎に七本インプラント治療をしてきた患者さんがいる。

だがこの患者さんは、タイでの手術がうまくいかず、咬み合せの低さと上部構造物の不適合があり、しっかりと噛めず、どうしても清掃性が不

良になり、常に歯肉の炎症が発生。困って当クリニックに來られた。

この患者さんはインプラント治療を受けるために一か月半、タイに滞在して治療を受けたとのことだ。安くて速い治療にひかれたらしい。

インプラントはTVや車などモノの購入と異なる、カラダの中に埋め込んで一生付き合っていくものである。受ける方の心構えも大切だ。

アジアでは日本と韓国が、インプラント治療においては秀でている。

台湾では一万五千人の歯科医師がいるが、インプラント認定医とされる医師は二百人位であるという。タイはさらに少なく、ミャンマーにおいては、日本や海外で研修してきた医師が数十人程度存在するだけであるとも聞く。

次号では、海外の歯科医療事情や、海外に赴いて気付いた日本人の歯についてお話を続けたい。

顎関節症

ドライマウス

舌痛症

ストレスは

見える！

すべては「噛みしめ」が原因だった

長栄歯科クリニック
亀井 英志
Kamei Hideshi

気がつくとも歯を食いしばっている。…心当たりの方は、当コラムの亀井医師の著書『すべては『噛みしめ』が原因だった』をお読みいただきたい。‘未病。の原因をまとめた良書です。

亀井英志(かめいひでし)

1951年群馬県前橋市生まれ。76年東京歯科大学卒業。都立病院歯科口腔外科医を経て、84年より長栄歯科クリニック院長。臨床ゲノム医療学会理事。

